

## セレンディピティのビジネスでの応用

公益社団法人 日本防犯設備協会 理事  
株式会社ゴール 代表取締役社長

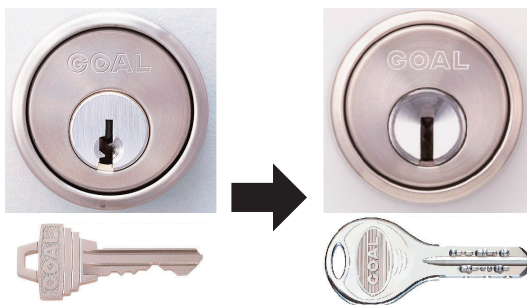
岸本 俊仁



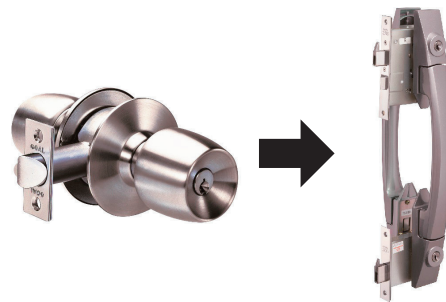
私が半世紀近く勤務する株式会社ゴールは、来年の11月に創立110年を迎えるロックと電気錠システムのメーカーです。住宅・ビル・ホテル・学校・病院等全ての建物のドアに使われており、安全・安心の観点から防犯の一部を担っていると自負しております。

また、100年以上の歴史の中で、特に印象深いのが約20年以上前に起きたピッキング騒動であり、ここ最近の電気錠を始めとする、システムの進化です。時代の変化に沿って製品開発を行ってきましたが、特に安全・安心に関する視点から下記に標準タイプと用途限定タイプのロックを標記してみました。(図①～④参照)

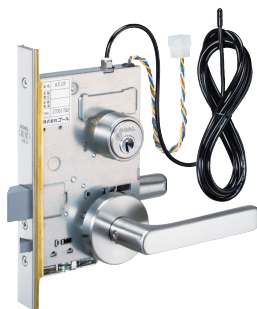
①6本ピンシリンダー・キー ⇒ V18シリンダー・ディンプルキー



②握 玉 錠 ⇒ プッシュプル錠



③防爆錠



④磁 気 カ ー ド 錠 ⇒ 非 接 触 カ ー ド 錠



ところで、この様にロックの開発に関する事でも少しは関係があると思っていますのが、セレンディピティと云う言葉です。本来は「予想外の幸運が偶然手に入る」という意味ですが、科学の世界では偶然から大きな発見につながる事が多いため、この言葉がよく用いられます。ただ単に幸運や発見が起こるのではなく、観察や知識などが大事になります。実際、ニュートンが木からリンゴが落ちるのを見て発見した「万有引力の法則」やイギリスの細菌学者、フレミングがシャーレに偶然発生させてしまった青カビからペニシリンを生み出した事が有名です。

また、身近な事象では駅の自動改札機の実験があります。切符を入れた時になかなか磁気を上手く読み取れず開発に行き詰ったオムロンの開発者が気晴らしに溪流釣りに行ったらしいです。しかし、開発のことが頭から離れず、ボーッと竿を垂れているだけだったらしいのですが、その時、上流から一枚の笹の葉が流れて来て、岩と岩が挟まっていて水の流れが速い所で笹の葉が反転して流れていったとの事です。これにヒントを得て自動改札機の実験に成功したと読んだ事が有ります。他にも我々が日常的に、何気なく使用しているものに3Mの技術者が開発した付箋があります。開発者が元々は、粘着性の強いものを作るつもりでしたが上手くいかず、粘着性の弱いものが出てしまった。失敗と見なされたが逆転の実験で商品化され付箋として世界中に広がっている。日本発の話では、デンソーの技術者が生み出したQRコードがあります。工場の責任者から製品をバーコードで管理しているが何んとかもっとも楽にできないかとの依頼に答えたものだそうです。この実験も開発者が趣味の囲碁をしている時に碁石の白黒の配置から浮かんだとの事です。

この様に科学の世界では、仕事以外の最中に良いアイデアが偶然にひらめいた事から実験が多々生まれています。これらの事象は、何も行動せずに生まれるのではなく、真剣に物事に取り組み、その過程から産まれるものです。

現に、ノーベル物理学賞を受賞した江崎 玲於奈 氏、ノーベル化学賞を受賞した田中 耕一氏・吉野 彰氏を始め多くの受賞者がこのことを述べています。次にセレンディピティが起きる要因についてですが「行動」「気づき」「受容」があると言われており、このセレンディピティの概念は研究分野だけでなくビジネスの分野にも適用できると言われ始めています。特に業務や人材育成については、参考になるのではないのでしょうか。

各個人が持っている潜在能力を引き出す環境を作り発揮出来る様にすれば、これまでの常識や経験を大きく覆すようなものが生まれ会社や社会に影響を与えるイノベーションを生み出すと思います。

実際、MLBで野球の概念を変えた大谷 翔平選手などは、大リーグと云う環境の中で、潜在能力を引き出された人材ですし、その事例でしょう。

ところで今後の日本に於いて、男性のみならず女性の能力を活用する事がより一層重要になってくると思います。大変有名な方で国際社会の舞台で活躍した日本人初の国連難民高等弁務官・緒方貞子さんの生き方や、同じく日本人女性で初めて国連事務次長を務める・中溝泉さんなどが、セレンディピティに必要な行動する能力を有していると思います。今回は、自らの目的に向かって人生を導き出した女性の紹介をしたいと思います。

今から約30年近く前、日本に女性がパイロットの機長になると云う発想自体がなかった時代に、女性旅客機長を目指した一人その女性の話です。日本航空の藤 明里さんと云う方です。当時の日本ではエアラインのパイロットになるには、宮崎の航空大学校に進学するか、大学を卒業して航空会社の自社養成制度に応募するしかなかった。航空大学校に応募するも受験資格の身長に届かず、一方航空会社は、女性パイロットの養成はしていないとの返事。女性というだけでことごとく門前払いの状況の中で、目を海外に向けるとドイツやアメリカでは当たり前活躍していましたので、パイロット＝男性という常識を疑い、諦めない理由を探し続け、途中で壁が現れたら方向転換して新しい扉をノックする。その繰り返しの途中で、道を切り開いて来た方です。実際日本がだめならアメリカに渡り、パイロットのライセンスを取得します。

ただライセンスを取得したからと言って、すぐにパイロットの職に就けるわけではありません。いつチャンスが来てもいいようにできる準備をして千載一遇のチャンスをものにしてパイロット(副操縦士)になります。そこから、機長に昇格するまでの10年間は、目の前の業務を確実に遂行して結果を出す様に務めたとの事です。

この様に、どんな時にも諦めない理由を探し続けたからこそ目的の場所にたどり着けたと思います。藤さんの生き方そのものがセレンディピティであり、その要因の「行動」「気づき」「受容」がすべて含まれています。

記述させて頂いた様に、女性が新しい事にチャレンジする場合、男性と比べてまだまだハンデが有ると思います。それにもかかわらず目的にトライする姿勢は非常に勇気を与えてくれるものです。これからは男女を問わず、新しい事にチャレンジする人材を育てるための環境をいかに作っていくかが大事だと思います。

